

マリーヤ (八場の芝居)

イサーク・バーベリ 作
能美 武功 訳
城田 俊 監修

登場人物

ムコーヴニン (ニコライ・ヴァシリエヴィッチ)

リュドミラ 彼の娘

カーチャ (カチエリーナ・ヴァチエスラーヴォヴァ・フェーリゼン)

ドウイムシツツ (イサーク・マルコーヴィッチ)

(訳註 ドウにアクセントあり。)

ガリーツィン (セルゲイ・イッラーリオノヴィッチ)

革命前は公爵

ニエフェドーヴナ ムコーヴニンの乳母

エフスチーグニエイツチ 傷痍軍人

ビシヨーンコフ 同 右

フィリップ 同 右

ヴィスコーフスキー 革命前は騎兵隊の大尉

クラフチエーンコ

マダム ドーラ

警察署長

カルマイコーヴァ ニエーフスキー通り八十六番地のアパートの

トの部屋係 (ドウイムシツツのアパートの)

アガーシャ 玄関番 (訳註 ムコーヴニンのアパートの)

アンドレーイ 床磨きの男

クジマー 同 右

スーシユキン

サフォーノフ 労働者

エレーナ 彼の妻

ニユーシユカ

警官

酔っ払い (警察署での) (訳註 第六場、台詞なし)

赤軍の兵士 (前線からの) (

(場 革命の始めの頃。ベトログラードで。)

第一場

(ニエーフスキー通りにあるアパート。ドウイムシツツの部屋。汚い。袋、箱、家具、がいつぱいに散らかっている。傷痍軍人二人・・・ビシヨーンコフとエフスチーグニエイツチ・・・が、運んで来た食料品を並べている。エフスチーグニエイツチは脂肪肥りの赤ら顔の男。顔は大きい。両足は膝上まで切断されている。ビシヨーンコフは片腕がなく、空の袖をピンで服に止めている。二人とも胸に勲章を下げている。)

ゲオルギー勲章。ドウイムシツツは算盤を弾いている。)

エフスチーグニエイツチ 到るところ道路を封鎖しやがった・・・ヴィリツツ(訳註 ヴにアクセントあり。)の関門にサンドベルクがいた頃はまだ良かったが・・・あいつも首になつちまいやがった。

ビシヨーンコフ そりやあもう酷いもんでさあ。

ドウイムシツツ カラリヨーフはまだいるのか。

エフスチーグニエイツチ 「まだいる」？ いるなんてもんじゃないやしません。とつくに首ですよ。どこもかしこも封鎖、封鎖。闇取締係を次から次と替えやがる。

ビショーンコフ 食料はもう危(やば)いですよ、ドウイムシツツさん。取締係の連中に一人慣れたかと思うと、すぐそいつがいなくなるんですからね。あいつら、物を取り上げるだけで放つときゃしない。目の前でこちとらの命まで取り上げやがる。

エフスチーグニエイツチ 嵌めてやろうって言ったって、ああ毎日次から次へと新し手を出されちゃお手上げだ。今日だつて駅に行つてみたら、一斉射撃だ。何だろう。また政権の交替か・・・何のことはない。やつらの新し手なんださあ。まづ最初に撃ちまくる。それから訊問だつていう。

ビショーンコフ 最近では食料といやあ何でも没収しやがる。「子供の為だ。」それが連中の言い草だ。「ツァールスコエセローの子供達の為だ。あそこには今子供しいない。」・・・あそこが孤児養育院なんだとよ。

エフスチーグニエイツチ あんなこと言つてやがって。いるのは、髭の生えた孤児ばかりさ。

ビショーンコフ こつちだつて、腹が減りや取つて食つさ。腹が減りや、何が何でも取つて来るに決まつたらあ。

ドウイムシツツ フィリップはどこなんだ。フィリップのことが心配だ。あいつをどうして放りだして帰つてきたんだ。

ビショーンコフ 放りだした訳じゃありません、ドウイムシツツさん。あの野郎、奮えちまいやがつたんで。

エフスチーグニエイツチ 引つ張られたんじゃないかな、あいつ。

ビショーンコフ なにしる連中は無茶苦茶をやつて来るんです、ドウイムシツツさん。

エフスチーグニエイツチ フィリップの奴ですがね、外目(そとめ)にはあいつは立派で自立つ野郎ですよ、だけど腹が出来てないんだ、腹が。あつしらは駅の手前まで来た・・・一斉射撃だ。みんな右往左往、泣き喚いてる。俺はあいつに言つた。「いいか、フィリップ、あの壁の穴を抜けて、ザーガラド通りに入るからな。あそこへ行きゃ、兵隊達も知つてる奴ばかりなんだ、だから・・・」あいつはいつもものあいつじゃないんでさ。腰を抜かしてやがる。「お・・・俺は怖い。行かない。」怖いんならいい。そこへいる。いいか、この酒運び屋。怖いつたつて、たいしたことはない。おもいつき、²りぶん殴られるだけだからな。ウオツカを挟んだ帯が一本。ぶん殴られて鼻は潰されるさ。だけどそれだけで済むさ・・・」だけどあいつは動こうともしやがらん。地面にへばりついてるんだ。外目には強そうに見えるんだがな。まるで鬼みたいにな。だがてんで腹が出来ちゃいない。

ビショーンコフ まあ、ひよっこり戻つて来ますよ。そう思います、ドウイムシツツさん。あんまり目はつけられていなかつたようだし。

ドウイムシツツ ソーセージにはいくら払つたんだ。

ビショーンコフ 一万八千(ルーブル)です。ものも悪いです。最近じゃあ、ヴィチエーブスク製だつと、ペテルブルグ製だつと、かわりはないですよ。工場は同じなんです

から。

エフスチーグニエイツチ（壁の隠し戸棚を開け、その中に食料を詰め込む。）何でも同じ。オロシアを一色にしようとしてるんだ。

ドウイムシツツ 小麦はいくらした。

ビショーンコフ 九千ルーブルです、ドウイムシツツさん。高いなんて言おうものなら、「なら、持っていくな。」ですよ。取引なんて感覚はもうあいつらにはないんです。お前ら、買わない？ 買わないなら有り難いくらいだ。（こうです。）最近のあいつらの厚かましさを、ちよつと口じゃ言えません。

エフスチーグニエイツチ（パンを隠し戸棚に入れながら。）奥様が手づから作って下さったんです、このパンは。本当にご自分で・・・よろしくお伝えしたいとのこと・・・

ドウイムシツツ で、子供達はどうかだ。元気にやっていたか。

ビショーンコフ 元気にしておられました。とてもお丈夫そつで。毛皮の外套を着て、金持ち坊やちゃん達ですよ・・・奥さんが、一度是非いらして下さいと。

ドウイムシツツ 今は動きが取れないな・・・（算盤を乱暴に弾いて。）ビショーンコフ！

ビショーンコフ はっ。

ドウイムシツツ 利益がないぞ、ビショーンコフ。

ビショーンコフ ひどく厳しくなってきたんで、ドウイムシツツさん。

ドウイムシツツ これじゃあ、利益が出ないんだ、ビショ

ンコフ。

ビショーンコフ 利益はどうやって無理でさあ、ドウイムシツツさん。こいつと二人で考えたんですがね、もう扱うものを変えた方がいいんじゃないかって。食料ってやつはかさばるんで・・・どうしても。小麦粉はかさばるし、麦だつてかさばる。肉もかさばる。もう、こうなったら別のものにしたらどうかって。例えばサッカリンだとか、宝石・・・ダイヤなんか。これならすごいですぜ。いざという時にはぱつと口に入れる。分かりやしませんや。

ドウイムシツツ フィリップのやつ、どうしたんだ・・・どうもあいつが心配だ。

エフスチーグニエイツチ 半殺しの目にあっちゃったんじゃないですか、ひよつとして。

ビショーンコフ それに革命前までは（一九一八年頃は）³ 傷痍軍人と言やあそれだけで人は一目置いてくれた。ところが今じゃ・・・

エフスチーグニエイツチ そうだ。あの教育つてやつだ。以前は連中、俺達の前へ出りや、何だか良心がうづづつていう風だった。今はどうだ。思いやりなんて薬にしたくもありやしない。「お前、足、どうしたんだ？」「榴散弾でな、両足いつべんにやられたんだ。」「フン、だけどたいしたこたあなかつたんだ。両足を切る時さ。痛みは取るんだからな。

お前、痛くはなかつたらう。」「何言つてんだ。何で痛くない。」「だって誰でも知つてらあ。すぐクロ口ホルムをかかされて気絶だ。何も感じはしない。今不便なのは足の指さ。指先が引つ張られるような、痒いような、そんな気分がする

のさ。そこには何も無いのにな。それだけじゃないか。「どつしてそんなことを知ってるんだ。」「おい、兵隊、今じゃあ、民衆だつて教育つてものを受けるのさ。」「ほおお、教育ね。じゃあ何故お前、俺が汽車から落つこちそつになつてゐる時に。・・・ええい、何故お前、俺を汽車からほうり出すんだ・・・片輪の人間なんだぞ、俺は。」「片輪だからほうり出すのさ。ロシアじゃあな、ためえみみたいな片輪が多過ぎらあ。もう見るのもつんざりだ。」「そして薪(たきぎ)と同じ扱いだ。ほうり出しやがる。本当にあいつら、腹に据えかねまさあ。ドウイムシツさん。

(ヴィスコーフスキー登場。乗馬用のズボンと背広、の姿。ワイシャツのボタンを外している。)

ドウイムシツツ あんたですか。

ヴィスコーフスキー そうだ。

ドウイムシツツ 挨拶はどうしたんですか。

ヴィスコーフスキー リュドミラが来なかつたか、ドウイムシツツ。

ドウイムシツツ 挨拶は犬にでも食われたんですかね。・・・

まあいいでしょう。来たらどつしました？

ヴィスコーフスキー ムコーヴニン家の例の指輪はあんなのところにある、それは分かっているんだ。だけど長女のマリーヤが態々あんなところに持つて来る訳はないんだから・・・

ドウイムシツツ 人に託されてきたんです。猿に託されたんじゃありませんな。

ヴィスコーフスキー どうしたんだ。どついう経緯(いき

さつ)なんだ。

ドウイムシツツ 売ってくれと頼まれましてね。

ヴィスコーフスキー 俺が買う。

ドウイムシツツ ほほう、何故でしょう。

ヴィスコーフスキー あんたは相変らず紳士じゃないな。

ドウイムシツツ 何を仰いますか。いつだつて紳士ですよ。

ヴィスコーフスキー 紳士は物を訊かないもんだ。

ドウイムシツツ あの指輪で外貨が欲しいつていう話でしてね。

ヴィスコーフスキー 外貨で五百ポンド、あんたは俺に借りがあるぜ。

ドウイムシツツ 何のことでしょう、それは。

ヴィスコーフスキー 糸の商売があつたらう。

ドウイムシツツ あれはそつちじゃありませんか、へまをやつたのは。

ヴィスコーフスキー 騎兵部隊じゃあ、糸の取引のやり方は教わらなかつたからな。

ドウイムシツツ あんたはすぐかつとなりなさる。だから

へまをなさるんです。

ヴィスコーフスキー 時間をくれよ、親方。そのうちにはうまくなる。

ドウイムシツツ うまくなる訳はありませんよ。人の話を聞かないんですからね。私がこつ言つ。するとあんたはあなさる。戦争じゃあ隊長か伯爵か、お偉いさんなんでしょう。

だから多分かつとなる必要もありましょう。ですけど、商売でかつとなつたら終です。人がどこに坐るか、それを見届け

るようにして始めて商人ですよ。

ヴィスコーフスキー 分かりました、分かりましたよ、親方。

ドウイムシツツ 私は怒ってるんです、ヴィスコーフスキーさん。それから、もう一つ別のことで怒っています。あの公爵の部屋、何ですか、あれは。

ヴィスコーフスキー ああいうのがお気に召すんだらうと・

ドウイムシツツ あの女は処女だったんです。ご存じだったんでしょ？

ヴィスコーフスキー あの女は、正真正銘の初物さ。

ドウイムシツツ ああいう初物は私には不要です。いいですか、騎兵隊長さん。私は普通の人間なんです。公爵だか何だか知りませんが、その娘が、絵にあるマリア様のような顔をしてやって来て、銀の匙のような眼で私をじろりと見る。そんなのはまっぴらご免なんです。ちゃんと注文をつけておいた筈です。よく聞いておいて欲しかったですね。三十に近くても、いや、三十五でもいい。ある程度の辛酸は舐めてきた家庭の主婦、私の小麦とパンと、子供の為のココア一袋、そういった物を受け取ってくれそうな女・・・それに、事が終わった後で私に、「汚らわしい下司野郎。私を汚（けが）して・・・犯して・・・」などと言わない女を、と。

ヴィスコーフスキー ムコーヴニン家の次女（リュドミラ）がちゃんと後に控えている。

ドウイムシツツ あの人は嘘つきです。私は嘘つきは嫌いだ。何故長女に会わせてくれないんですか。

ヴィスコーフスキー マリーヤは軍隊に入った。（ここにはいない。）

ドウイムシツツ あの人のそ女です。マリーヤ・ニコラーエヴナ・・・顔を見てよし、話してよし。あれが軍隊に行くまで態々あんた、待っていたんですな。（私に隠して。）

ヴィスコーフスキー 長女の方はやつかいなんだ、ドウイムシツツ。ひどくやつかいなんだ。

（訳註 次の台詞は、傷痍軍人同志での会話。）

エフスチーグニエイツチ 「お前はな、怖いと思う暇もなくやられちまっていたのさ。痛いもへちまもあるもんか。」
こう言いやがる。酷い話さ。こつちの感覚のことまで保証しやがる。

（遠くで銃声。次に近くで銃声。銃声繁くなる。ドウイムシツツ、あたりを消し、扉に鍵を掛ける。窓からの光のみ。緑色のガラス。外は厳寒。）

エフスチーグニエイツチ （囁く。）酷いもんだ。

ピシヨーンコフ なんていう暮らした。

エフスチーグニエイツチ 水兵達もドンパチャりやがる。

ピシヨーンコフ こんなのは暮らして言えるんですかね、ドウイムシツツさん。

（扉にノックの音。沈黙。ヴィスコーフスキー、ポケットからピストルを取り出し、安全装置を外す。再びノックの音。）

ピシヨーンコフ 誰だ。

フィリップ （扉の後ろから。）俺だ。

エフスチーグニエイツチ 声を確かめる・・・俺が誰か言ってみる。

フィリップ 開けてくれ。

ドウイムシツ フィリップだ。

(ビションコフ、扉を開ける。部屋に輪郭のはっきりしない、大きな凶体の人影。それが入ってくる。暫く壁にすがって黙った儘。灯が一斉につく。フィリップの顔半分は、火傷のための大きな肉腫で覆われている。胸に顎を埋め、眼は閉じている。)

ドウイムシツ 撃たれたか。

フィリップ いや。

エフスチーグニエイツチ へばっているな、フィリップ。

(エフスチーグニエイツチとビションコフ、フィリップの毛皮の長外套、上着、その下に着ているゴム製の衣装をはぎ取り、床に投げる。ゴムの衣装は、まるで第二のフィリップであるかのように、形を保って床に転がっている。フィリップの手の指(複数)は、切り傷が沢山出来ていて、血が出ている。)

エフスチーグニエイツチ ひどい扱いをしやがる。あいつら、人間と言えるか。

フィリップ (顎はまだ胸に埋めた儘。) つけて来られたんだ・・・連中、つけて来たんだ。

エフスチーグニエイツチ あいつか。

フィリップ あいつ?

エフスチーグニエイツチ 革脚絆の、例の・・・

フィリップ うん。

エフスチーグニエイツチ もう包囲されているのか。

ドウイムシツ この家までつけられたのか。

フィリップ (やっこのこと言葉になる。) 家まではつけられてない・・・銃声が聞こえて、あっちに行った。

(ビションコフとエフスチーグニエイツチ、フィリップを抱え、寝かせる。)

エフスチーグニエイツチ だから言っただろ。壁の穴から抜けようって・・・

(フィリップ、唸る。吐息をつく。遠くにまた銃声。機関銃のバリバリいう音。それから静寂。)

エフスチーグニエイツチ 酷いもんだ。

ビションコフ なんていう暮らした。

ヴィスコーフスキー 指輪はどこなんだ、親方。

ドウイムシツ 指輪、指輪。あなたには指輪しか頭になんのですか。

第二場

(ムコーヴニン家のアパート。寝室兼食堂兼書斎。一九二〇年代特有の部屋。しかし家具は古風でしゃれている。小型の鉄製のストーブ。その煙突の為のパイプが、部屋を横断している。ストーブの前には小さく切った薪が置いてある。衝立の後ろで、劇場へ行く用意の為、リュドミラー・ニコラーエヴナが着替えをしている。ランプの上に、髪を巻く為の鍔(こて)が暖められている。カチエリーナ・ヴァチエスラーヴォヴナが、衣服にアイロンを掛けている。)

リュドミラー あんた、遅れてるのよ、カーチャ。劇場に行つてご覧。今はもうみんな着飾ってるんだから。クルイモフの姉妹、ヴァーリヤ・メイエンドールフ・・・みんな、雑

誌から抜け出たような服装よ。それに豪勢なものよ、生活だつて。

カーチャ こんな世の中で、誰がいい生活をしているっていうんですか。誰もいやしませんよ。

リュドミール それがいるのよ。あんた、遅れてるのよ、カーチャ。プロレタリアートの貴族様達はね、今は裕福なの。

だから女性に奇麗に着飾って欲しいの、あの人達。あんたのいい人の、レーチカだつて、あんたがむさ苦しい格好で出歩いたら、嬉しいと思う？ 嬉しくなんかありやしないわよ。今はプロレタリアートの貴族様達、裕福なんだからね、カーチャ。

カーチャ 私がお嬢さまだったら、つけ睡(まつげ)は止めますけど・・・それに、その袖のないドレスですけど・・・リュドミール あんた、忘れてるんじゃないの、カーチャ。私はね、男の人と一緒に行くのよ。

カーチャ お嬢さまには悪いですけど、あんな人に分かる訳ないんです。

リュドミール それはどうかしら。あの人にはあの人で、好みもあるし、気質だつて・・・

カーチャ 赤毛は激しい・・・誰でも知ってる。

リュドミール あの人、赤毛じゃないわ、あのドウイムシツ。・・・チヨコレート色だわ。

カーチャ そうね・・・あの人、そんなに金があるの？
ヴィスコーフスキーが嘘を言っているんじゃないの。
リュドミール 六千スターリングっていう話ね、ドウイムシツは。

カーチャ 片輪を使って一財産ね。

リュドミール 片輪を食い物にしてるっていう言い方ね・・・

でも誰が思い付いたっていい筈よ。あの人達には、同業組合があるし、共同出資だし。それに傷痍軍人は搜索されないのですんだ、今までは。だから物を運ぶには好都合。

カーチャ そんなこと思い付くには、やっぱりユダヤ人でなくちゃ。

リュドミール ユダヤ人の方がずっとましじゃない、カーチャ。ここらへんにいるコカイン常習者よりも・・・そう。

一人はコカイン常習者、一人はピストルで頭を撃ち抜いて自殺、一人は辻馬車の馭者。エヴロペーイスキー・ホテルの前で、乗客が来るのを待っている・・・ Parle-tous au court (今のところ) ユダヤ人だわ、一番いいのは。

カーチャ そうね。確かに、頼れるっていう点じゃ、ドウイムシツ以上の人はいないわね。

リュドミール それにね、カーチャ。私達は女なの。ただの女。あの玄閻番のアガーシャが言ってる通り。「フラフラしてるの、飽きちゃった。」・・・女つてずっと男なしてて訳にはいかないの。そうよ、そういう訳にはいかない・・・

カーチャ 子供もつくるつもり？

リュドミール 赤毛を二人ね。
カーチャ と言うことは・・・正式な結婚？

リュドミール ユダヤ人はね、カーチャ、ちゃんとした結婚でなきゃ、駄目なの。ひどく家庭的なんだから。妻にはものを相談するし、子供には気を配るし、それに自分のものになった女性には常に敬意を払っている。そう、この女性への尊敬の念、ていつのが心をつつのね。あの人達の特徴なのよ。

カーチャ ユダヤ人をどうしてそんなによく知っているの。
リュドミール それはこういう訳。パパがね、ヴィーリン
で一部隊受け持っていたことがあって、それは全員ユダヤ人
だったの。そして友達にラビがいた。ラビってというのはみん
な哲学者なのよ。

カーチャ (衝立の上から、アイロンをかけた服を渡す。)
芝居の後は・・・食事？

リュドミール そういうことになるわね。

カーチャ あなたどうせ飲むのね、リュドミール。それも
しこたま。そして情欲の嵐。後は闇の中に溺れてゆく・・・

リュドミール とんでもない。暫くは騎士道が続くの。一
箇月・・・二箇月？・・・ユダヤ人にはそれが必要なの。キ
スだって許すかどうか、私まだ決めてないわ。

(ムコーヴニン将軍、登場。フェルトの長靴。軍隊の赤い裏
地の外套を部屋着に作り直したものを着ている。眼鏡を二個
携えている。)

ムコーヴニン(読む。)...一八二〇年十月十六日、
皇帝アレクサンドル一世の治世下、セメノーフスキー連隊付
の近衛親衛隊は、軍人としての誓いの義務、及び上官への服
従の義務を忘れたとされるが、それはどういうことだったの
か。夜遅く、勝手に集会を持つと言つ暴挙を行ない・・・」
(頭を上げる。)点呼の後、下士官以下の兵隊が廊下に集ま
り、中隊長に、十日ごとの自宅査察・・・こういう査察があつ
たんだな、あの頃は・・・の廃止を願い出た。この反乱・・・
このことを反乱と定義づけたんだ、連中は・・・この反乱に
対して、罰はどうだったか・・・(読む。)'首謀者と認め

られた下士官は、死刑。それ以外の下士官は、不服従に対す
る見せしめとして、絞首刑。上等兵以下の兵隊達は、他の兵
隊への見せしめの為、連隊整列の中、笞打たれながら通過す
る笞打ちの刑六回・・・」

リュドミール 随分酷い刑だわ。

カーチャ 昔は酷く残酷だった。誰でも認めるわ、それは。

リュドミール ポリシェビキー達、パパの本に飛び付くん
じゃない？ 昔の軍隊に悪いことがあれば、これみたくで罵
りたいんだから、あの人達。

カーチャ 違うわ、それは。現在のことしか興味がないの
よ、あの人達。

ムコーヴニン 私はこのセメノーフスキー事件を二つの章
に分けて論じるつもりなんだ。第一は、この反乱の原因の研
究。第二は、反乱、懲罰、鉞山への流刑等、事件そのものの
記述。私のこの話では、軍人の生活とはどういうものが、に
焦点を置く。決して単なる人物の羅列ではない。シードロフ
とか、プローシカ、その他大勢の軍人達の悲惨な運命、無慈
悲な警察の手に渡され、以後二十年間、戦時の強制労働へと
シベリア送りになった連中の話。

リュドミール パパ、カーチャにどうしてもパーヴェル一
世の章を読んでやらなきゃ。トルストイが生きていたら、こ
このところ、きつと褒めた筈だわ。

カーチャ 新聞じゃあ「今」が大事なの。「今」しかない
のよ。

ムコーヴニン 過去に対する知識がなきゃ、将来の指針も
ありやしない。結局ポリシェビキーのやったことだって、イ

ワン一世の意図を継いだのさ。つまりロシアの領土統一さ。だから我々幹部将校は、たとえ自分達の過ちであろうと、後進の為に残しておいてやるのが・・・（義務なのさ。）

（呼び鈴がなる。玄関に人を迎える音。ドウイムシツツ登場。毛皮のコートを着て、手に包を持ってゐる。）

ドウイムシツツ 今日、ムコーヴニン閣下。今日は、カーチャさん。リュドミラさんは？

カーチャ お待ちしていますよ。

リュドミラ（衝立の後ろから。）私、着替え中。

ドウイムシツツ 今日、リュドミラ。大変な寒さですよ。犬も風邪ひくような、そんな寒さです。イッポリットが馬車でここまで連れてきてくれて。あいつ、車の中で喋りづめだ。ああ言いこう言い、よくまあ話題があつたもんだ。ああいうのはめつたにいいですよ。もう遅いんじゃないですか。芝居は大丈夫かな。

ムコーヴニン やれやれ、まだ日が明るいつていうのに、芝居見物とはな。

カーチャ 今は芝居は五時に始まるんですよ。

ムコーヴニン 電気の節約か？

カーチャ ええ、まづ電気が第一ですけど、夜遅く帰ると、道で身ぐるみ剥がれますから。

ドウイムシツツ（包を開けながら。）ちよつとハムを持って来ました、閣下。通じやないので私には分からないのですが、この牛は飼料に麦を使つたつて言うんですがね・・・麦を食わせたか、何を食わせたか・・・とにかく私がそこに居合わせた訳じゃないので・・・

（カーチャ、隅に行き、煙草を吸う。）

ムコーヴニン いやー、君、これはちよつと戴き過ぎだよ。ドウイムシツツ それから、ませものソーセイジを少しと・・・

ムコーヴニン（意味は掴めない。）ませもの？

ドウイムシツツ こんなものがお口に合うとは思いません。小さい頃から召し上がったことなどおありとは思っておりませんから。でもミンスクでも、ビリューイスクでも、チエルノーブイリでも、大評判でして。鷲鳥だと思いましたが、材料は。ちよつと味をみて戴いて、御感想をお聞かせ願えれば有り難いです・・・如何ですが、本の進み具合は、閣下。

ムコーヴニン じわじわと行つとるよ。アレクサンドル帝まで進んだからな、それでも。

リュドミラ 小説みたいに読めるのよ。トルストイの「戦争と平和」に似てるわ。ほらあの、兵隊達の話があるところ・・・

ドウイムシツツ それは楽しみですね・・・家の外ではドパンチやらせておくんですな。それから、壁に頭をぶつつけて死んで行く奴がいたつて構やしません。閣下は閣下の仕事・・・本を完成させる・・・これに専念しなければ。出版記念の祝宴は私に任せて下さい。それから最初の百部は私が買いますからね・・・それからこれはサラミンソーセイジです、閣下。自家製サラミンなんです。知り合いのドイツ人が作つたんですかね・・・

ムコーヴニン 君、ドウイムシツツ君。わしは本当に怒るぞ・・・

ドウイムシツツ ムコーヴニン將軍に怒られるとは、私も名譽なことです。・・・このサラミは逸品ですよ、閣下。作ったドイツ人というのが、昔は有名な学者でしてね。今はソーセージ作りの名人で・・・リュドミール、遅刻じゃないかな。私は心配になってきた。

リュドミール（衝立の後ろから。）出来たわ。

ムコーヴニン これでどのくらいの借りになるかな、ドウイムシツツ。

ドウイムシツツ ニエーフスキー通りで今日死んだ馬の頭の、蹄鉄一個分でしょうかね。

ムコーヴニン いや、真面目な話なんだ。

ドウイムシツツ 真面目な話っていうことになると・・・馬二頭の蹄鉄二個分ですか。

（衝立の後ろから、リュドミール登場。目の覚めるような美人。均整のとれた身体。頬に紅。耳にイヤリング。袖のない、黒い天鵞絨（ビロード）のドレス。）

ムコーヴニン うちにはいい娘がいる。そうだな、ドウイムシツツ。

ドウイムシツツ 否定出来ませんな、それは。

カーチャ これがロシア美人っていうものですわ、ドウイムシツツさん。

ドウイムシツツ そうでしょうな。私は専門家でないので断定は出来ませんが。

ムコーヴニン これの姉のマリーヤにも会って貰いたいな。リュドミール 考えてもみて。姉は家で人気者だったの。

その人気者がどうでしょう、今は兵隊さん。

ムコーヴニン 何が兵隊さんだ、リュドミール。あれは政治局に行ったんだ。

ドウイムシツツ 失礼ですが、閣下。政治局っていうのはつまり、兵隊のことなんです。

カーチャ（リュドミールを隅に引っ張って。）駄目。イヤリングは駄目よ。

リュドミール そつ？

カーチャ 当たり前でしょう。駄目です。それから食事のことだけ・・・

リュドミール カーチャ、安心して寝てなさい。釈迦に説法よ。・・・（カーチャにキス。）カーチャ、馬鹿ね、本当に大丈夫なんだから・・・（ドウイムシツツに。）靴を取って頂戴。（脇を向いて、そつとイヤリングを外す。）

ドウイムシツツ（飛んで行く。）ちよつと待って！

（リュドミール、靴、外套、オレンブルグのスカーフで頭と顔を覆う。ドウイムシツツ、甲斐甲斐しく仕える。）

リュドミール 着てみてびっくりね。まだ売らないですんでいる。・・・パパ、私がいなくても、ちゃんとお薬、飲むんですよ。それからカーチャ、パパにはもう仕事はさせないのよ。

ムコーヴニン カーチャとちゃんとお利口に留守番をしてるさ。

リュドミール（ムコーヴニンの額にキスする。）パパのこど、気にいって？ ドウイムシツツさん。このパパは他のパパとはまるで違うの。

ドウイムシツツ お父様は珠玉ですよ。人間じゃありません

ん。

リウドミール 父を知っている人なんていやしない。私達だけだわ。・・・イッポリット公爵は何処で待っているの？

ドウイムシツツ 玄關のところですよ。「待て。」が命令。すると待っているんです。躡、軍隊教育・・・ですからね。じゃあ失礼します、閣下。

カーチャ 豪遊は駄目よ。

ドウイムシツツ 豪遊？ それは駄目ですな。今の世の中じゃ、(やるうと思つても。)

リウドミール じゃ、パパ、行って来るわ。

(ムコーヴニン、出口まで娘とドウイムシツツを送る。扉の後ろで声と笑い声が聞こえてくる。ムコーヴニン、戻つて来る。)

ムコーヴニン 好感の持てる、立派なユダヤ人だな、あれは。

カーチャ(ソファの隅に行き、ちぢこまり、煙草を吸う。)でも、ユダヤ人でみな面白くないわ。どうしてああなんでしょう。

ムコーヴニン カーチャ、お前、どうして連中に面白味なんか求められると思つているんだい。連中には通りの向こう側でしか暮らしちゃいけないと言つてきたんだ。こつち側に来りゃ、おまわりが来て向こうに追つ払つて。キーエフのピコーフスキー通りでだつてそうだったんだ。面白味なんて、それでどうして出て来る。連中にはそんなことより別のことで驚くじゃないか。あのエネルギー。生きようとする力。反抗の精神・・・

カーチャ あのエネルギーは今ではロシア人にまで感染してきていますわ。でも私達は別。私達にはそんなもの、無縁。

ムコーヴニン(連中の)運命論・・・これは我々に無縁じゃない。君主を倒したラスプーチン、それから事実上君主制を倒したドイツ女のアーリーサ、これだつて我々に無縁じゃない。ユダヤ人から輩出した人物達、我々にとって有り難い者達ばかりじゃないか。ハイネ、スピノザ、キリスト・・・

カーチャ 以前は日本人のことも褒めていらしたわ。ムコーヴニン 日本人か。そうだ、日本人・・・あれは偉大な国民だ。学ばねばならんことが山ほどある。

カーチャ マリーヤが志願して行つたのも無理ありませんわ。そのお父さんが革命派なんですよ。

ムコーヴニン 私が革命派？ 私は軍人だ、カーチャ。だから私は将校達に言つてやるんだ。軍人なんてものは、昔も今も変わりません。戦争、戦うという事が何時から軍人に無縁になつてしまつたんだ、とね。(訳註 話題を戻して。)

我々はユダヤ人を虐待してきた。やつらはそれに対して身を固め、次に攻撃に転じてきたんだ。そしてその武器は？ 機智だ。熟慮だ。それに言つてみれば、まあ「氣違い沙汰」という武器だ。それも「理想」といつ名においてね。

カーチャ 「理想」？ 分らない。私達は不幸。もう幸福なんて来ることはないの。私達は犠牲者なんだわ。

ムコーヴニン 旧体制を根底から揺さぶる。それもいいだろう。これからはのんびりなんかしていられないんだ、カーチャ。ロシアのただ一人本物の皇帝、ピョートル大帝は言つ

ている。「ぐずぐずする奴は死ぬしかない。」・・・そう。
これが原則なんだ。だから将校達に言ってるやるんだ。いいか、
諸君。地図をじっと見つめる勇氣を持たなきゃならん。そして
認識することだ。どの地域で敵に裏をかかれたか、どこで、
何故、敗北せねばならなかったか。厭なことから目を背ける
な。目を見開け。これが私のモットーだ。そしてこれをいつ
も守っているんだよ、私は。

カーチャ 薬をお飲みにならなければ。もうその時間です
わ。

ムコーヴニン 共に肩を組んで戦ってきた戦友。あいつら
に私は言ってるんだ。「諸君、tirez vos conclusion. (さあ、
結論を出すんだ。)ぐずぐずする奴は死ぬしかないんだ。」
とね。(退場)

(舞台裏から、冷たく澄んだチェロの音が聞こえる。曲はバツ
ハのフーガ。カーチャ、耳を澄ませる。次に立ち上がる。電
話の方に進む。)

カーチャ 革命委員会地方本部をお願いします・・・レー
チカさんいらつしゃいますか・・・レーチカ、貴方?・・・
今忙しい? 私、ちよつと・・・貴方、一人だけじゃないん
でしょう、革命を進めなきゃならないのは?・・・だけど貴
方つたら何時でも人と会う時間はないって言うんだから・・・
「人と会う」って何かって? 夜と一緒に過ごす人、貴方が
必要な時・・・

(間)

カーチャ レーチカ、お願い。私をドライブに連れて行っ
て・・・そう、忙しい?・・・じゃ、(仕方ないわね)・・・

いいえ、怒ってないわ。どうして私が怒るの。(電話を切る。)
(音楽、止む。ガリーツイン登場。ひよる長い男。軍服を着
てゲートルを巻いている。手にチェロ。)

カーチャ 飲み屋では何て言われたの、公爵さん。「淋し
い曲はやめる」って?

ガリーツイン 「淋しい曲はやめる。気が変になってくる。」
カーチャ あの人達には陽気なものでなくつちや、ガリー
ツインさん。あの人達、何もかも忘れたいのよ。一息つきた
いの。

ガリーツイン みんながって訳じゃない。静かなものをや
れって言う奴もいる。

カーチャ (ピアノの椅子に坐って。)どういう人達? 聞
いてるの。

ガリーツイン 積み込み人夫達だ。船の。

カーチャ 貴方、労働組合員になれるわね。・・・そこで

夕食も出して貰えるの?

ガリーツイン うん、夕食つきだ。

カーチャ (「りんご」の歌を弾く。咳くように歌う。)

船は進む。水は渦巻く。

(いつかこの船も沈んで)

俺達は魚の餌さ・・・

俺達兵士、魚の餌を乗せて・・・

私の後について。この「りんご」の歌を飲み屋で弾くとい
いのよ。

(ガリーツイン、あとをつける。間違える。また直してあと
をつける。)

カーチャ セルゲイ、貴方、どう思ってた？ 私、速記を習った方がいいかしら。

ガリーツイン 速記？ 分からないな。

カーチャ

樽に腰掛けるんだ。すると涙が流れてくる。

誰も結婚してはくれない。

ただ俺を踏み付けにするだけさ……

速記者って、今不足してるんじゃない？

ガリーツイン 知らないな、僕は。（「りんご」の歌を続ける。）

カーチャ 私達の中で本物の女性……それはマリーヤだわ。あの人、迫力。勇気がある。それで女なの。私達はただここにいて、溜息をついてるだけ。あの方は政治局で幸せいっぱい。幸せ……これが人間の基準ね。他にどんな基準を持って来たって当て嵌まりはしない。発明しようたって、無理なのよ。

ガリーツイン マリーヤは方向転換が出来るんだ。いくら急でもな。昔からだ。それがあれの得意技なんだ。

カーチャ それがいいのよ……

おい、りんご。お前はどこへ、

どこへ転がって行くんだい？

それにあの人、アーキムとのロマンスはあるし……

ガリーツイン（弾く手を止める。）アーキムって、誰のことだい。

カーチャ マリーヤの属している部隊の指揮官。革命以前は鍛冶屋だった人……手紙のどこかには必ずこの人のこと

が書いてある。

ガリーツイン それがどうしてロマンス？

カーチャ 勤ね。行間ににじみ出ている……それとも（速記なんかやめて、）バリソグレイプスクに帰るのがいいのかしら。故郷に。生まれた所ですものね……あなた、修道院に……あの修道院長のところに時々話しに行くのね。その方なんていう名前？

ガリーツイン シオーニイ。

カーチャ そのシオーニイさん、何を教えてくれるの？

ガリーツイン 君はさつき幸せっていうことについて話したね……院長が僕に教えてくれること、それは、人を支配することに幸せを見いだそうとしてはならない。人を支配する、権力をふるう、この貪欲な気持ち、そこに幸せを見いだそうとしてはならない……この権力欲っていうやつが癌³なんだ。いくらなだめようとしても、すぐ頭をもたげてくる。

カーチャ 次よ、いい？

俺は樽に腰掛ける。

樽はぐらぐら揺れている。

ふところには一文もなし。

ああ、一杯やりたいんだが……

シオーニイ、いい名前だわ。

第二場

（リュドミラとドウイムシッツが、ドウイムシッツの部屋にいる。テーブルの上に夕食の残骸。それに酒罫数本。隣の部屋の一部が見える。ピシヨンコフ、フィリップ、エフス

チーグニエイツチが、そこでトランプをしている。エフスチーグニエイツチは、(膝の上から切れているので)椅子の上のせられている。)

リュドミラ フェリックス・ユスーポフは美男子。まるで神様のようだった。テニスプレーヤー。全ロシアチャンピオン。男くさが欠けてはいたけど、人形のような美男・・・私がブラジミル・バグレイに初めて会ったのは、そのフェリックスの家だった。皇帝はしまいまでこのバグレイの、騎士道流のあの良さが分からなかったらしいわ。

(訳註 皇帝はニコライ二世。 城田) 私達の間ではあの人、「イギリス流の騎士道」で通っていた・・・セルゲイは、フレリックスと友達だった。セルゲイは「ご存じね?」ほら、チェロを弾くあの人・・・あ、それからこのパーティーには番外があったわ。アンブローシー大司教が来ていた。呆れたの、驚いたの、この人、私に言い寄って来た。私にシャペン注ぐチャンスを決して逃さない。そしてその度にお坊さんらしい敬虔な、そしていやらしい顔をして私を見るの。(これが番外。ブラジミルの話だったわね。)この人、最初私を何とも思ってくれなかった。こつ言ったもの。「君、鼻、でかいね。それにその真つ赤な頬。典型的、あまりにも典型的なロシア女だよ。典型的すぎるんじゃない?」夜が明けて、私達二人、ツァールスコエへ向かった。車を公園に置いて、馬車に乗った。そこで訂正したわ。「リュドミラ、正直なところを言つとね、僕は一晩中君から目が離せなかったのさ。」「そんなことを言つて、ニーナ・プトウーリナは大丈夫なの、公爵さん。」ニーナとのロマンスは、

単なる浮気心だつて、私には分かっていた。「プトウールリナ? あれはもう終わった恋さ、リュドミラ。」「その終わった恋、初恋に、いつも男は戻るものよ。」ブラジミルは大公の位は持つていなかった。父親が身分の低い女を妻にしたせい。だから家族は皇后陛下に謁見が出来なかった。皇后のことをブラジミルは、悪の権化と言つていた。あの人には詩人だった。子供だった。政治には全然むいていない・・・私達はツァールスコエについた。夜が明けてくる時だった。ずつと下の方に池があった。その辺りでナイチンゲールが鳴き始めた・・・ブラジミルはまた言つた。「Magnoiselle Boutourline, cest le passé。」(ニーナ・プトウールリナ、あれはもう終わった恋さ。)
「公爵さん、終わった恋つていうのがくせものなの。揺り返しがあるの。それがまた怖いものなの・・・」

(ドウイムシツツ、灯を消し、リュドミラに飛び掛かり、ソファに押し倒す。争い。リュドミラ、やつと彼を跳ねのけて髪と衣服を直す。)

ビションコフ(カードをテーブルに置いて。ハートのクイーンでどつだ。(訳註 不明。))

フリッツ、クイーンか、しようがないな。

エフスチーグニエイツチ 両手は後ろで縛られて、柵のところまで引つ立てられたんだ。「おい、お前、後ろ向きになんな。」「だっこいつは言つたな。後ろ向きになんかなることはない。俺は軍人だ。この儘でズドンとやってくれ。」柵のそのへんは、生垣になっていて、一メートルくらいある。夜だ。村のはずれ。そこから先は草原だ。そしてその先は絶

壁・・・

ピションコフ（カードを切りながら。）次はこっちが親か。

フィリップ よーし、今度は・・・

エフスチーグニエイツチ 引つ立てて行って、全員銃を構えた。あいつは柵のところに立っていた。それからあいつの身体が、まるで地面から引き剥がされたように見えたんだ。両手は後ろ手に縛られた儘だぜ。やったのは神様としか思えないさ。柵を、身体を少し斜にして飛び上がったんだな。勿論兵隊達は撃つたさ。しかし夜だ。真つ暗だった。あいつはぐるりと柵を宙返りして・・・逃げた。

フィリップ（カードを配る。）そいつは英雄だ。

エフスチーグニエイツチ 本物の英雄さ。身の軽さ。サーカスにいたとしか思えん。あいつのことはお前と同じくらい良く知っている・・・それからうまく逃げ回っていたんだ。半年してまた捕まっちゃった。

フィリップ まさかまた銃殺つてことはないだろう。

エフスチーグニエイツチ 銃殺されたんだ。こいつは俺の考えじゃ、不法つてもんだ。墓から逃げ出した奴、半分墓に入っついて、もう一度目の目を見た奴。こついう人間を殺すつて法はない。

フィリップ 今どきそついう配慮などある訳はないな。

エフスチーグニエイツチ 不法だ。俺の考えじゃ。外国じゃあな、どこでだつて規則があらあ。死刑をつまく逃れた人間、そいつは運がいいんだ。もう生かしてけつてな。

フィリップ この国じゃ、一つしか考えはない・・・銃殺

は銃殺なんだ。

ピションコフ そうだな。それしかないな。

リュドミール 灯をつけて頂戴。

（ドウイムシツツ、スイッチを入れる。）

リュドミール 私、行くわ。（振り向いてドウイムシツツを見る。プツと吹き出して。）そんな膨れつ面をしないの。こつちに来て・・・どうだつて言うのよ。みんな無駄になつたとも思つてるの？ だつて最初は貴方に慣れる時間が必要じゃない？

ドウイムシツツ 僕はドタ靴じゃない。慣れる必要なんかないんだ。

リュドミール 隠すことなんかないわね。貴方、確かにいい感じよ。でもそのいい感じもつと強まらなくつちや・・・軍隊からマリーヤが帰つて来る。マリーヤと一度会つてね。うちの家族、あの姉がいなくて何一つ決まらないの。パパは貴方のこと、気に入ってるわ。でも貴方も見て分かつたでしょ？ パパには何も出来ない・・・それにまだ、決まつてないことが沢山あるじゃない・・・貴方の奥さんのことだつて・・・

ドウイムシツツ ここで何故女房の話が出てくるんだ。

リュドミール 私、分かつてるの。ユダヤ人には、自分の子供がどれほど大切かつて。

ドウイムシツツ くそつ。何故子供の話なんか。こんな話は止めだ。

リュドミール だからその時期が来るまでは、じつと私の傍に坐つて、辛抱していなきゃいけないの。

ドウイムシッツ ユダヤ人は、はるか昔からメシアを待ち望んでいるんだ。辛抱には慣れている・・・もつ一杯ぐつと・・・どう？

リウドミールラ もう随分飲んだわ。

ドウイムシッツ この酒は戦艦から仕入れて来たんだ。大公閣下にはちゃんとトランクがあつて・・・

リウドミールラ どうやるの？ こんなにうまく手に入れるの。

ドウイムシッツ 僕の仕入れ口・・・それは他の連中じゃあどうにもならないところだ・・・この一杯だけ、どう？

リウドミールラ いただきわ。ちゃんとお利口に坐つていてくれれば。

ドウイムシッツ お利口に坐つているとも・・・教会に行つたみたいに。

リウドミールラ そう。そのフロックコートだけど、それは教会で着るものよ。それから小学校の卒業式で校長先生が着る。法事で商人達が着る。(そういうものよ、フロックコートつて。)

ドウイムシッツ 分かった。フロックはもう着ない。

リウドミールラ それから芝居の切符だけど、決して一列目は買つもんじゃない。一列目を買つのは成り上がりがやること。

ドウイムシッツ しかし僕は実際、成り上がり者だからな。

リウドミールラ あなた、心は高貴なの・・・成り上がりとは違つわ。それからあなた、名前がいけない・・・今だつたら新聞に名前変更の広告を出しさえすればいいのよ、イズヴェー

スチアに。私だつたらアレクセイがいいわ。アレクセイ・・・どう？ 良い名前でしょう。

ドウイムシッツ 良い名前だ。(ドウイムシッツ、再び灯を消してリウドミールラに飛び掛かる。)

エフスチーグニエイツチ まただぞ。

フィリップ(耳を澄ませる。)

ピションコフ けどあの女は好きだな。他のやつらより

ずつといい。ちゃんと俺達にも挨拶をする。他の連中ときたら、ガサツで、一目で売春婦だ。あの女は違つ。俺のことだつ

て、ちゃんと名前を呼んで話をする。(訳註 ロシヤ語では、

名前と父称を呼ぶのが親しみ、またその上に丁寧さ、がある。)

(この男達のいる方の部屋に、ヴィスコーフスキー登場。エ

フスチーグニエイツチのうしろに立つ。トランプの状況を眺

める。)

リウドミールラ(身体を引き離して。)

ドウイムシッツ すぐ呼ぶよ。・・・こんな馬鹿げたこと

はもう沢山だ。

リウドミールラ 呼んで、今すぐ。

ドウイムシッツ 外はマイナス三十度だ。気違い犬でも外

にほつぱり出すのは気が咎(とが)める天気だ。

リウドミールラ 服もお化粧もめっちゃめっちゃ。どうやって家に帰つたらいいの。

ドウイムシッツ 魚心あつての水心だからな。

リウドミールラ 失礼な。あなた誰に向かって言つてるか、

分かつてるの。

ドウイムシッツ そう。分かつているからこつ言つんだ。

リュドミラ ほうら、ただだわ。歯が痛くなってきた。あ、痛い。とても我慢できない。

ドويمシツツ こう言えはあ言う。ああ言えはこう言う。か。ここでどうして歯の話なんかになるんだ。

リュドミラ 痛み止めないかしら、歯の・・・痛くて。

(ドويمシツツ退場。次の部屋でヴィスコーフスキーと突き当たる。)

ヴィスコーフスキー 湯加減は如何でしたかな、親方。

ドويمシツツ あの女、歯が痛いと言って・・・

ヴィスコーフスキー そりゃ、歯も痛くなるさ・・・

ドويمシツツ 馬鹿な。痛み理由などあるわけない・・・

ヴィスコーフスキー 仮病だよ、ドويمシツツ。それは仮病だ。

フリリツプ 痛むふりをしているんですよ、ドويمシツツさん。本当に痛いんじゃないよ。

リュドミラ (鏡の前で髪を直す。すらりと立ち、陽気に、上気した顔をして部屋を歩き回る。そして鼻歌。)

私のいい人、スマートよ、そしてがっちり。

私のいい人、優しく、それで残酷。

答でたたくの、絹でできた細い紐で・・・

ドويمシツツ 子供じゃないんだ、私は、騎兵大尉さん。

私の幼年時代はとくに過ぎていくんです。

ヴィスコーフスキー 分かってるよ。

リュドミラ (電話の受話器をとって。)(三二七五〇二をお願いします。・・・パパ?・・・私は大丈夫。・・・ナージャ・イヨハンソンが来てたわ、芝居に。夫婦づれで。・・・)

ドويمシツツの家で食事をするの・・・パパ、スペシーフツエヴァはどうしても見なくっちゃ。いいの。立派にパーヴロヴァの代わりを務めているわ。・・・薬は飲んだ? もう寝なげや駄目よ。・・・パパの娘は頭がいいの。本当に切れる頭。・・・カーチャ、あなた?・・・あなたの言い付け、ちゃんと守ってるわよ。うまくいってる。Le ménage continue, j'ai mal aux dents se soir. (調教は続いているわ。今夜は歯が痛い。)(部屋の中を歩き回る。鼻歌。髪に手櫛をいれてふわっとさせる。)

ドويمシツツ 人をなめている。こんなことが続いたら、いいですが、今度あの女が来ても、私は不在です。分かりましたね。

ヴィスコーフスキー 分かったよ。ここじゃあんたがボスだ。

ドويمシツツ いいですが、他の連中が私の子供とか女房の話するのは構いません。しかしあの女にはそんな権利はないんです。

ヴィスコーフスキー 分かった。

ドويمシツツ あの女なんか、女房の靴の紐を結ぶにも値いしない。ちゃんと分かってるんですね。靴の紐を結ぶにも値いしないんだ。

第四場

(ヴィスコーフスキーの家。ヴィスコーフスキーは乗馬ズボンに長靴の姿。上着なし。シャツのボタンをはずしている。テーブルの上は酒罎が散らばっている。しこたま飲んだ後。)

赤ら顔の、背の低いクラフチェーニコが軍服姿で長椅子に半分横になつてゐる。同じ長椅子に、マダム・ドーラ。痩せた女。黒い衣装。髪にスペイン風の櫛を差して、大きなイヤリングがぶら下がつてゐる。）

ヴィスコーフスキー いちどきにその金額だ、クラフチェーニコ。（歌う。）

俺は一つ、ただ一つしか、力なるものを知らない。

力、それは、燃えるような、情欲の力だ……

クラフチェーニコ で、いくらゐるんですか。

ヴィスコーフスキー 一万ポンドだ。いちどきに欲しい。

クラフチェーニコ、お前、外貨一万ポンドの札束を見たことがあるか。

クラフチェーニコ 全部系にかけるとですか？

ヴィスコーフスキー 何が糸だ……ダイヤだ。三カラット。青い海だぞ。深い色だ。傷なしのな。これならパリで売れるんだ。

クラフチェーニコ しかしそんなやつはもう出払つてゐるんじゃないませんか。

ヴィスコーフスキー なに、まだどこの家にも残つてる。

吐き出させる工夫をするんだ。……リムスキー・コルサコフ家にだつて、シャコフスコイ家にだつて。……この皇帝の町、サンクト・ペテルブルクには、ダイヤはまだいくらでも残つてゐる。

クラフチェーニコ 新しい世の中になつたからといって、急に商人にはなれないんじゃないやありませんか、ヴィスコーフスキーさん。

ヴィスコーフスキー なれる！……俺の親父は商売をやつていたんだ。田舎の屋敷を種馬と交換したりしていた。……親衛隊は降参したかもしれんがな、クラフチェーニコ、死んだんじゃないんだ。

クラフチェーニコ 外のあの女……は、こつちに入れてやつたらどうでしょう……あそこじゃ寒いです。

ヴィスコーフスキー なあ、クラフチェーニコ。俺はな、金持になつてパリへ行くんだ。

クラフチェーニコ あのドゥイムシツツのやつ、どこへ消えちまいやがつたんでしよう。

ヴィスコーフスキー うんこ中だ。便所の中でしびれをきらしてゐるんだらう。それとも例のクルランド人とかユダヤ人だとかとランプでもしてるんだらう。（扉を開ける。）

おい、リウドミラ、こつちに入つたらどうだ……（ヴィスコーフスキー、廊下に出る。）

ドーラ（クラフチェーニコの手にキスして。）あなた、太陽！あなた、神様！

（リウドミラとヴィスコーフスキー、入つて来る。リウドミラは毛皮の外套を着ている。）

リウドミラ 一体どうなつてるの！ 約束したつていうのに……

ヴィスコーフスキー そう。約束。金より大事なもののに、か。

リウドミラ 八時の約束。私は八時に来るつて言つておいた。今何時？ 九時四十五分……鍵を残している訳でもなし。あの人何をしてるの。

ヴィスコーフスキー 闇市だ。そのうち帰って来る。

リュドミラ 紳士じゃないわね、とにかく・・・あの連中。

ヴィスコーフスキー さあ、一杯やった方がいい、リュドミラ。

リュドミラ そうだわ、一杯。身体が凍えてきて・・・それにしても一体どうなってるの！

ヴィスコーフスキー マダム・ドローを紹介していいかな、リュドミラ。フランス国籍なんだ。「liberte, Egalite, Fraternite. (自由、平等、博愛)の国さ。他にいろいろ長所はあるが、その中で一番は、外国旅券を持っていることだな。

リュドミラ (片手を差し出す。) 始めまして。

ヴィスコーフスキー クラフチェーニコは知ってるね。革命前は少尉補、今は革命軍の砲兵だ。クロンシュタット要塞の十インチ砲の傍に立って、そいつを操作する。どっちの方向にでも自由自在だぞ、こいつは。

クラフチェーニコ ヴィスコーフスキーさんは機嫌がいいんですよ、今夜は。

ヴィスコーフスキー どっちの方向にでもだ・・・何が起るか知れたもんじゃないぜ、クラフチェーニコ。お前の生まれた町をぶつ壊せという命令がでる・・・お前はぶつ壊すさ。孤児院を撃つと命令が出る・・・お前は「方向・・・二、〇、八」と指揮する。そして孤児院をドカンドカンとやるんだ。こんなことは朝飯前にやってのけるさ。連中がお前を生かせてくれてな、ギターを弾かせてくれて、瘦せた女と寝かせてくれさえすればな・・・お前は肥っている。だから痩せ

た女が好きなんだ・・・お前は何でもするさ。誰かがお前に、自分のおふくろのことを三度、「俺の母親じゃない」と言えと命令する・・・お前はちゃんと言ってるのけるさ。しかしな、それからだ問題は。連中はもう一步踏み込んで来る。それからが問題なんだ。自分の気に入った仲間と酒を飲むのは禁止。読む本はみんな退屈。そいつを無理矢理読ませられる。歌う歌はみんな退屈。こいつをまた無理矢理歌わなきゃならん・・・ついにはお前さんも怒りだす。なあ、革命軍の砲兵さんよ。本気で怒りだすんだ。そしてキョロキョロよそ見をし始める・・・するとやって来るんだ。二人の私服のおじさんがね。「さあ行こう、クラフチェーニコ君。」「着替えは？ いらなんですか？」とお前は訊くさ。するとな、「何も持つて行かなくていいんだよ、クラフチェーニコ君。すぐすむことだ。ちよつと訊問があるだけ。それだけなんだから。」「なに、これでお前さんは一巻の終さ。なあ、革命軍の砲兵さんよ、金にして四カペイカ。それ以上びた一文いりやしない。みんな計算ずみさ。

ドロー ねえ、ジャック (訳註 これはクラフチェーニコへの呼びかけ。「ヤーコフ」のフランス語読み。) 送ってつて。もう帰る、私。

ヴィスコーフスキー 君の健康に乾杯だ、ヤーコフ・・・それから誇り高き国家、フランスにも、マダム・ドロー！リュドミラ (この間ずっと、注がれては飲んでる。) ちよつと行ってみる。あの人帰ってないか。

ヴィスコーフスキー 売り買いをちよこつとやって、戻ってくるさ・・・リュドミラ・ニコラーエヴナ・ムコーヴナ、

あんた、あれは自分で思い付いたの？ 歯が痛いっていう、あれ。

リュドミールラ そつ。自分で・・・いいでしょう？（笑う。）
こうでなきゃとても今は生きて行けない。ユダヤ人は、もう少し女性を尊敬しなくちゃ。近くに置いておきたいっていう女なら特にね。

ヴィスコーフスキー 君の顔が見えるぞ、リュドミールラ・・・
その顔はシジュウカラだ・・・さあ、シジュウカラ君、一杯行こう！

リュドミールラ お酒、きいてきたわ。ヴィスコーフスキー、あなた、何か入れたわね、これに。

ヴィスコーフスキー シジュウカラ・・・ムコーヴニン家の力という力は、全部マリーヤに行ったんだ。君に残っているのはその歯、小さなその一列の歯だけだ。

リュドミールラ つまらない話。

ヴィスコーフスキー それに君のその小さな胸。そいつは気に入らないな 女性の胸つてのは、ピカピカで大きくなくっちゃな。牛のおっぱいみたいに大きくて、どうしようもないっていうのでなきや・・・

クラフチェンニコ ヴィスコーフスキーさん。僕ら、もう行きます。

ヴィスコーフスキー 行くことはないさ、どこにも・・・
シジュウカラ、僕の嫁さんになるんだ、君は。

リュドミールラ 駄目。なるんだったらドウイムシツツの方。
あなたがどうなるか、それはちゃんと分かっている。今日は飲んだくれ、明日は二日酔、それからどこへともなく失踪。次

にピストルで頭を打ち抜いてしまふ・・・（これがあなたのやることよ）・・・駄目。私はやっぱりドウイムシツツ。

クラフチェンニコ ヴィスコーフスキーさん、もうこれくらいで私達は放免にして下さいよ、お願いします。

ヴィスコーフスキー どこにも行かせんぞ、まだ、いいな・・・ 乾杯だ。女性なるものに乾杯！（ドーラに。）これはリュドミールラ・・・この姉さんはマリーヤと言ってるね・・・

クラフチェンニコ その方はたしか軍隊に入ってる・・・
リュドミールラ 今は前線に出ている。

ヴィスコーフスキー 前線、前線だよ、クラフチェンニコ。その部隊の指揮官が、なに、昔ウエイターだったんだぜ。

リュドミールラ 違うわ、ヴィスコーフスキー。金属工よ。
ヴィスコーフスキー そいつの名前がアーキムっていうんだ。さあ、「女性」に乾杯だ、マダム・ドーラ。女つてものは、男を愛すんだ。軍人でも、給仕人でも、関税の役人でも、中国人でもな・・・連中の仕事は男を愛することさ。ことは警察でお調べだ。（杯を上げて、歌つ。）

「女性よ、乾杯だ。
その優しさに、
その素晴らしさに、
ただのいつとき
男を愛してくれる、そのいつときに・・・」

本当はいつときもありはしない。くもの巣の厚さだ。それからそのくもの巣が破れる・・・この姉貴はな、マリーヤっていうんだ・・・なあ、クラフチェンニコ、お前想像出来るか、女王を愛するっていうことがどういふことか？ 女王は

宣(のたま)うのさ、「下品な男・・・出て行きなさい・・・」
リュドミール(笑う)「よく似てるわ。」

ヴィスコーフスキー「下品な男・・・出て行きなさい。」
これで騎兵隊の隊長殿はおだぶつ。それからマリーヤはどこへ行く・・・フルシュターツカヤ通り十六番地の四号だ・・・
リュドミール お止めなさい、ヴィスコーフスキー、そんな話は。

ヴィスコーフスキー さあ、クロンシュタットの砲兵隊に乾杯だ！・・・さてと、マリーヤはフルシュターツカヤ通りに行くことに決めた、と。仕立の良いグレイのスーツをバシッと決めて、家を出る。トロイツキー橋の近くですみれを買い、スーツのボタン穴にそれを差す。フルシュターツカヤでは公爵が・・・チェロを弾くあの公爵、(知ってるな？)・・・独り暮らしのアパートの部屋を掃除している。箆筥に汚れた下着をつつこんで、洗っていない食器類は中一階に運ぶ・・・そして珈琲だ。珈琲とブチフルを用意する。マリーヤは来る。二人は珈琲を飲む。彼女は自分と一緒に、すみれを、春を持って来たんだ。ソファに坐る。両足をその上に上げて。その引き締まった優しい足に、公爵はショールを掛けてやる。彼女の目がそれを迎えて光る。微笑み。誘うような、身を投げ出すような、悲しそうな・・・誘うような微笑み・・・マリーヤは彼の灰色の頭を抱いて言う。「公爵！ どうしたの、公爵。」しかし公爵の声はまるで(ローマ法皇の)お経の呟きだ。 *Passé, rien ne va plus.* (パスだ。一歩も進まない。進展はなしだよ。)

リュドミール まあ、辛辣。厳しいわね、あなた。

ヴィスコーフスキー いいか、クラフチェンコ。想像してみろんだ。お前の目の前で脱いでいくんだ。女王様がだぞ。胸着を。スカートを。ストッキングを・・・お前だって怖くづく筈だぞ、クラフチェンコ・・・

(リュドミール、身体をのけ反らせて笑う。)

ヴィスコーフスキー フルシュターツカヤ十六番地から彼女は去る・・・その足跡はどこにある？ 僕が地面にひれ伏して接吻したい、その足跡は？ しかしあのアーキムのところじゃ、違う。そつ期待しようじゃないか。彼の口からなら、もう少し野獣のような声が出て来たかね・・・君の意見は？

リュドミール。

リュドミール ヴィスコーフスキー、あなた、この中に何か混ぜたわね。私、頭がくらくらして来た。

ヴィスコーフスキー こつちに来るんだ、リュドミール。(リュドミールの肩を捕まえ、力づくで自分の方に引き寄せらる。)

ヴィスコーフスキー ドウイムシッツはいくら払ったんだ、あの指輪に。

リュドミール 何の話？

ヴィスコーフスキー あの指輪は君のじゃない。姉さんのだ。君は他人の指輪を売ったんだ。

リュドミール 放して！

ヴィスコーフスキー(次室への扉までリュドミールを押しに行く。)来るんだ、シジュウカラちゃん。

(部屋にドーラとクラフチェンコ、残る。窓にサーチライトの光、ゆっくりと通る。髪を振り乱して、目は酒で膨れ、

ドーラがクラフチェーンコにしなだれかかる。彼の手にキスし、唸り、回らぬ舌で何か言つ。爪先立ちでフィリップが入つて来る。顔は酷い火傷の跡。ゆつくりと音を立てずにテーブルから酒とソーセージとパンを取る。）

フィリップ（小さな声で、頭を下げながら。）構わんでしよう？ ヤーコフさん。

（クラフチェーンコ、頭を振る。（訳註 日本でなら縦に振るところ。）フィリップ、用心深く裸足の足を進め、出て行く。）

ドーラ あなた、太陽。あなた、神様。あなた、全部。

（クラフチェーンコ、黙っている。耳を澄ませている。ヴィスコーフスキーが部屋へ入つて来る。煙草に火をつける。両手が震える。次室の扉は開いている。リュドミラ登場。長椅子に身を投げ、泣く。）

ヴィスコーフスキー 泣くんじやないよ、シジウウカラちゃん。結婚式までにはなあるさ・・・

ドーラ ジャック、私、家に帰りたい・・・家に連れて行って、ジャック・・・

クラフチェーンコ ちよつと待つんだ、ドーラ。

ヴィスコーフスキー じゃ、別れに一杯だな、諸君！

クラフチェーンコ ちよつと待つんだ、ドーラ。

ヴィスコーフスキー 別れに一杯だ。ご婦人のためにな。

クラフチェーンコ よくありませんな、大尉殿。

ヴィスコーフスキー ご婦人に乾杯だ、ヤーコフ！

クラフチェーンコ よくありませんな、騎兵大尉殿。

ヴィスコーフスキー 何だ、よくないとは。

クラフチェーンコ 小便が赤い時には、女とは寝ないものです、ヴィスコーフスキー殿。

ヴィスコーフスキー（軍人の口調で。）なんだと、もう一辺言ってみる。

（間。泣き声、止む。）

クラフチェーンコ はつきり申し上げますと、男は淋病の時には・・・

ヴィスコーフスキー 眼鏡を取るんだ、クラフチェーンコ。一発食らわせる。

（クラフチェーンコ、ピストルを出す。）

ヴィスコーフスキー ふん、面白い。

（クラフチェーンコ、引き金を引く。幕。幕の下りている間にも数発の銃声。身体の倒れる音。女の悲鳴。）

第五場

（ムコーヴニン家。隅で、長持ちの上に年老いた乳母が蹲（うづくま）つて寝ている。テーブルの上にランプの光。カーチャがムコーヴニンに手紙を読んで聞かせている。）

カーチャ 「朝早く、中隊参謀部の起床喇叭で私は目を覚ます。八時までには政治局本部に着いていなければならぬ。

そこでは何もかも私の仕事・・・連隊新聞の記事の編集、部隊の文盲達のための学校の運営。補充人員はすべてウクライナ人。彼らの言葉、その響きを聞いていると、イタリア語を思い出す。ロシア政府はこの数百年、彼らの文化を抑圧、否定してきた。だからペテルブルグでも、エルミターージュと冬宮の向かいにある自分の家においても、まるでポリネシアに住

んでいるのと変わりはない。．．．私達ロシア人は、周囲の人を誰も知らないし、また知ろうともしない。．．．昨日、授業で、パパの本からパーヴェル一世殺害の章を読んで聞かせた。自国の皇帝を誅殺することは彼らにとつてひどく当たり前に見えたらしい。(平気な顔で、溜息さえ聞こえない。)

そして私に質問してきた。．．．ここでは平民の精神、実務的な感覚で物が見えるのね。．．．その時の連隊の配置はどうだったか、宮殿の部屋はどのような配置になっていたのか、見張りについた兵はどういう人間だったのか、首謀者は誰だったのか、パーヴェルはどのように民衆を虐待したのか。．．．私、ずっとパパのことを考えています。夏にパパが来てくれたらと。ポーランド人が変な動きをしなければの話だけ。．．．

パパ、大好きなパパ。見て戴きたいわ、新しい軍隊、新しい兵舎。．．．パパがいつも話してらした昔のそれとは大違い。来て戴く頃までには、公園は花盛り、緑が奇麗よ。馬も新しい草を食べて、体重を元に戻しているわ。それから鞍も補充がついて。．．．このこと、アーキムにも話したの。アーキムも賛成。ただ、家族のみんなが順調であること、それが条件。元気でいて下さらなくっちゃ。．．．今は夜中。仕事が遅かった。階段を登って、自分の部屋に帰る。四百年も人に踏まれてきた階段。私の部屋は城の塔の天辺、天井は丸くなっている。昔はこの持ち主だったクラスニーツキー伯爵の武器庫に使われていた部屋。この城は絶壁に建てられている。直下には青い河。その向こうが果てしない草原。その先に鬱蒼とした森が壁のように立っている。城の各階には、見張りの兵用に銃眼がくり抜いてある。そこからクルミヤ人やロシア人

が接近して来るのを見張ったり、攻めて来る敵の頭に沸騰した油を注ぎ掛けたりした。老女のゲードヴィガ。．．．この人は最後のクラスニーツキー伯爵に仕えた家政婦だった人。．．．が、今夜は私の食事を作ってくれ、暖炉に火をつけておいてくれた。暖炉は黒々としていて深い。まるで地下室のよう。．．．

・眼下に公園。そこで馬が数頭まどろんでいる。ふと目を覚まして身体を動かしたりする。コサック達が焚火の周りで夕食をとっている。低い声で歌を歌っているのが聞こえてくる。木々に雪が積もっている。樫の木の枝と栗の木の枝が絡み合っている。遠くにのびている庭園の小道に、彫刻に、でこぼこの銀色の覆いが掛かっている。彫刻はまだ保存されている。槍を投げようと構えている若者、裸の、凍えている女神達、曲げられたその腕、波うっている髪の毛、目の見えないその両眼。．．．ゲードヴィガはまどろんで頭をこくりこくり。暖炉の中で、積み上げられた薪の山が、急に燃え上がって崩れている。この暖炉は作られて百年以上。(その年月のせいかな)煉瓦がガラスのようによく響く。今、丁度この手紙を書いている時、火が金色に燃え上がった。アリオシャの写真が私の机の上にある。(訳註 リュドミラの婚約者だったのか。三十頁に、アレクセイと名前を変えた方がいいと、ドويمシツに言っている。)あの人を殺すのを躊躇しなかった人達、その人達がここにいる。丁度今その人達と別れて来たところ。彼らが釈放されるのを、私は手助けした。．．．アリオシャ、私は正しい事をしたのかしら。貴方の遺言、「雄々しく生きるんだ」を、私は実行しているのかしら。私の行動が正しかったってという判断、その判断にあの人は

反対しないような気がする。・・・遅くなると寝つかれなくなってしまう。パパや皆に対する漠然とした不安、それに夢が怖い。夢はいつも追跡、拷問、それに死。私は奇妙な混合物の中で生きている。一つは自然に近づくこと。それと、パパや皆への心配と。リュドミールはどうしてたまにしか手紙をくれないの。先日あの人に手紙を出しておいた。届いたかしら。その手紙には、私が軍隊に従事しているの、その部屋は没収されることはない、と。アーキムの署名がしてある。その他に、自己の蔵書が持てるという特別保護証がパパに与えられるべきだという（役所宛の）手紙も入れておいた。もし期限が切れたら更新すること。更新は教育人民委員部。住所はチエルヌイシヨーフ橋四十番。リュドミールが結婚して、家を構えてくれれば、どんなに嬉しいでしょう。但し相手の男は私達の家にちよく顔を出さなきゃ駄目よ。それにパパと知り合いにならなくちゃ。会えば分かるものよ、どんな人か。あ、それにニエフェドローヴナにも会わせること。あのばあやのことを、働かないからって、カーチャはよく叱るけど、あの人もう年寄りなの。ムコーヴニンの二世代を育てたんですからね。自分一流の考えも、自分独特の感情もある。ただ単純な人間と思ったら大間違い。私、昔からばあやのことを、ただの百姓とは思っていなかった。そうは言っても私達、あの人達のことでは何を知っているって言うんでしょ、あのポリネシヤに住んでいたこの私達が。・・・ペテルブルグでは食料事情がさらに悪くなっているっていう噂。正式な仕事についていない人は、アパートから追い出す。シーツや下着までもはぎ取るっていう話・・・私達がここでこん

ないい生活をしているのが恥ずかしい。アーキムは二度も私を狩に連れて行ってくれた。私は乗馬用の馬を与えて貰った。ドンコサツク産のものを・・・」（カーチャ、頭を上げる。）
ねえ、おじさん。あの人、立派にやっているわ。
（ムコーヴニン、掌で両眼を覆う。）

カーチャ 泣かないで・・・

ムコーヴニン 私は神様に訊ねているんだよ、カーチャ。誰にでも神様の御心はある。でも、どうして、どうしてこの私に、この愚かな、自分しか愛さないような不心得者に、神様、あなたはこんな素晴らしい子供を与えて下さったのですか。マリーヤを。リュドミールを。

カーチャ でもそれは有り難いことじゃありませんか、おじさん。泣くことはありませんわ。

第六場

（警察分署。夜。ベンチの足元に、酔っ払いが、鍵型に曲がって横たわっている。自分の顔に指を向け、しきりに自分自身に教え諭（さと）している。ベンチの上には、見なりの立派な、肥った男がまどろんでいる。洗い熊の毛皮外套に、丈の高い毛皮の帽子。外套の前がはだけていて、そこから裸の、灰色の胸が見える。警察分署長がリュドミールを訊問している。もぐらの皮製の、彼女の帽子が、横っちょにずれている。髪が乱れていて、毛皮外套は肩からずり落ちている。）

署長 名前は。

リュドミール もうかえして。

署長 名前は。

リュドミール バルバーラ。

署長 父称は。

リュドミール イヴァーノヴナ。

署長 職場は何処なんだ。

リュドミール 煙草工場。

署長 労働組合員証は。

リュドミール ここには持ってないわ。

署長 何故出鱈目を言うんだ。

リュドミール 私は結婚しているの・・・もうかえして。

署長 出鱈目を言っただけが面白いんだ。ずっと前からブルイレフのことを知っているのか。

リュドミール 何のこと？ 知らないわ。

署長 糸の伝票にブルイレフの署名がある。お前を通してグートマンに届いている。糸の倉庫はどこなんだ。

リュドミール 何のこと？ 倉庫って何？

署長 何のことか、今分かる。(警官に。)おい、カルムイコーヴァを呼べ。

(警官、シユーラ・カルムイコーヴァを導き入れる。ニエーフスキー通り八十六のアパートの部屋係。)

署長 あのアパートの部屋係だな。

カルムイコーヴァ ああ。交替で。

署長 この女が分かるか。

カルムイコーヴァ ああ。よう知つとります。

署長 証明出来るものがあるか。

カルムイコーヴァ この人のこたあ知つとりますで。この人のお父さんはな、將軍さんでさあ。

署長 この女は仕事についているのか。

カルムイコーヴァ 湯気を上げる仕事でさあ。それが仕事と言えりゃ。

署長 結婚はしているのか。

カルムイコーヴァ 暗闇でこつそりな。連れあいなど、うんざりするくらい、いませあ。そのうちの一人なんざあ、一晚中便所で唸つてた。こいつの歯のお陰でな。

署長 何が歯だ。何の話だ。

カルムイコーヴァ この女が一番よう知つていませあ、どんな歯か。

署長(リュドミールに。)今までに拘引されたことがあるな？ 何度だ。

リュドミール 人に病気をうつされて・・・私は病気。

署長(カルムイコーヴァに。)確認しとく必要があるんだ。

こいつは何回拘引されとる。

カルムイコーヴァ わしゃ知らん。よう言わん。・・・知らんこたあ、よう言わん。

リュドミール もうくたくた・・・かえして。

署長 静かにしろ！ 俺の目を見るんだ。

リュドミール 頭がぐるぐる回って・・・気が遠くなる。

署長 こつちを見るんだ。俺の目を。

リュドミール うるさいわね。どうしてそんなもの見なきやならないの。

署長(半狂乱で。)どうして？ どうしてか教えてやろう。

俺はな、五日間寝てないんだ。寝てないんだぞ・・・分かるか、それがどういふことか。

リユドミール 分かるわ。

署長（リユドミールに近づいて、両肩を掴んで目を見る。）
拘引は何回だ・・・言うんだ・・・

第七場

（ムコーヴニン家。ほやのない石油ランプが点っている。影が床と天井に揺れている。そのランプの前でガリーツインが祈っている。長持ちの上でニエフェドヴナ（乳母）が寝ている。）

ガリーツイン 「・・・誠にまことに汝らに告ぐ。一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん。もし死なば、多くの果（み）を結ぶべし。己が生命（いのち）を愛する者はこれを失ひ、この世にてその生命（いのち）を憎む者は之を保ちて永遠（とこしへ）の生命（いのち）に至るべし。人もし我に事（つか）へんとせば我に従へ。わが居る處に我に事（つか）ふる者もまた居るべし。人もし我に事（つか）ふることをせば我が父、これを貴（たふと）び給はん。今わが心騒ぐ。我なにを言ふべきか。父よ、この時より我を救ひ給へ。されど我この為にこの時に至れり・・・」

カーチャ（音もなく近寄る。ガリーツインと並んで立つ。彼の肩に頭を置く。）レーチカとは本部で待ち合わせていたわ、ガリーツイン。昔、玄關の間だったところで。そこには油布の掛かった長椅子がある・・・私は近づく。レーチカは扉に鍵を掛ける。それから、後、鍵を開ける・・・

ガリーツイン うん。

カーチャ 私、田舎に帰る。バリソングレープスクに。

ガリーツイン うん。それがいい。

カーチャ レーチカは教えなきや気がすまないの。いくらでも教えることがあるのね。誰を愛すべきか、誰を嫌うべきか・・・それに、最大多数の最大幸福・・・私は最小数ね・・・いや、その数にも入らない。

ガリーツイン 数には入るべきだがな。

カーチャ そうね。数には入らなくちゃ・・・ばあや、私は自由になったのよ・・・起きて、お願い。起きて。それじゃ最後の審判の日にだつて目が覚めないわ・・・

ニエフェドヴナ（頭を上げる。）リユドミール・・・あの子は？

カーチャ すぐ帰るわよ、ばあや。私はもう田舎に帰るの。もうお前をがみがみ叱る人はいなくなるわ。

ニエフェドヴナ なんでわしを叱りんさる。わしのどこが悪い・・・わしは生まれついてのばあや。子供の為に、子供を育てる為に雇われとる。子供はもういやせん。女よ、えつと（訳註 沢山の意 島根 市木村の方言。ニエフェドヴナの言葉はこの方言に統一。）おるのは、子供はおりやせん。女も一人はいくさに行つて。あの子がおらんと家はわや（めちやめちやの意。）よ。もう一人はいつそやれんようになって（方言 につちもさつちもいかなくなって。）・・・なんでこれが家なら。（何故これが家と言えるのか。）・・・子供もおりやせんのに。

カーチャ あんたに生んであげましようか、神様の思し召しによつて。

ニエフェドヴナ あんたもわやをやつとるんよ、カーチャ。

わしにやちゃんと分かつとる。あんたもやれんようになつとる。そがんことじゃ、ええこたあなあ。(良いことはない。)

ガリーツイン 田舎に帰るんだ、カーチャ。バリソグレーブスクに。あそこなら君を必要とする人がいる。荒野だからな、あそこは。獣(けもの)達が殺し合いをやって生きている。

ニエフェドール ムラストーフの家(いえ)・・・たいした家(うち)じゃなあ。(ない。)ただの物売りよ。稼ぎもたいしてありません。それでも自分のところのはあやにや、年金を取ってやったんで。お役所に運動したんよ。一と月五十ルーブリ・・・わしにも運動してくれんかいの、公爵さん。なんでわしにや年金がこんのかいの。

ガリーツイン (ストップに小さく切った薪を入れながら)私の言うことはもう誰も聞かないんだよ、ばあや。もう私には何の力もないんだ。

ニエフェドール たいした家じゃなあ。(家じゃない。)

ただの物売りよ、それが・・・

(扉開く。フィリップが入って来る。それに向かい合って、扉を開けたムコーヴニン、後ずさりして登場。フィリップはぼろを着て、巨大な、形の定まらない防寒用頭巾を被っている。フィリップの顔の半分は焼け爛(ただ)れて、奇怪な肉の塊。フェルトのごつい長靴を履いている。)

ムコーヴニン 誰だ、君は。

フィリップ(ムコーヴニンに近づきながら) リュドミーラさんを知っている者です。

ムコーヴニン 何の用か。

フィリップ あつちで喧嘩があつたんです、閣下。

カーチャ ドウイムシツツさんから?

フィリップ そつです。ドウイムシツツさんのところから喧嘩。何でもない事から起こつたんです。

カーチャ で、あの人も関わりに?

フィリップ そつです。お嬢さんもそこに。皆と一緒に。

くだらない事からです、閣下。馬鹿な事からで。ヴィスコーフスキーさんが何か言つて、クラフチェンコさんが何か言い返して・・・怒鳴りあつて・・・二人とも相当飲んでたんです・・・

ガリーツイン 將軍、この男とは、私が話します。

フィリップ 特別変わったことはなかつたんです。ただ誤解が・・・二人とも相当飲んでたんで・・・それに拳銃が手元にあつて・・・

ムコーヴニン 娘はどこにいる。

フィリップ それが、閣下、不明です。

ムコーヴニン 娘はどこだ。言うんだ。私には何を言つても大丈夫だ。

フィリップ(やつと聞こえる声で) パクられたんで・・・

ムコーヴニン 目の前で人が殺されるのだから見てきたんだ。私は軍人だ。

フィリップ(より大きな声で) パクられたんで、閣下。

ムコーヴニン 逮捕か。理由は何だ。

フィリップ 病気がどうとかこうとかで、おつ始(ぱじ)まつたんで・・・クラフチェンコさんが言つたんです。

「あんたが病気をうつしたんだ。」・・・するとヴィスコ

フスキーさんがぶっぱなして。拳銃は丁度自分が持っていたんで……ぶっぱなす……すると、すぐやつらが……

ムコーヴニン やつら？……チェカーか。（訳註 チェカーはスGBの前身。）

ファイリップ 引っ立てて行ったんで。警察か何か他のものか、区別はつきません……今は連中、制服なんか着ちゃいません、閣下。外見じゃ分かりませんや。

ムコーヴニン 私はスモーリヌイに行くぞ、カーチャ。

（訳註 スモーリヌイは革命本部があつた所。もと女学校。

城田）

カーチャ 行っちゃ駄目です、おじさま。何処へも。

ムコーヴニン 行くぞ、スモーリヌイに。今すぐ。

カーチャ おじさま、それはどうかお止めになって……

ムコーヴニン 自分の娘が帰って来るか来ないかが問題なんだぞ、カーチャ。（電話に近づく。受話器を取って。）陸軍の参謀本部を頼む。

カーチャ お止めになって、おじさま！

ムコーヴニン 同志レーチカをお願いしたいのだが……ムコーヴニンだ。……いや、私が何者であるかは説明し難いんだが……かつての第六軍の指揮をとつたムコーヴニン

將軍なんだが……同志レーチカ、あなたですか……暫くですね、フョードル君。こちらはムコーヴニン。お元気で

すか……仕事中まことに相すまんが……実はその……今日夕刻、ニエーフスキー通り八十六番のアパートで、武装

した人物によつて、私の娘リュドミラが連れ去られた。あなたにこのことを訴える積もりはないんです、フョードル君。

あなたの立場だ。これは迷惑なことは分かっています。しかし次のことは報告しておきたいんです。つまり、私の長女マ

リーヤにはどうしても会つておきたい、と。実は最近私は身体

の調子が悪くてね、フョードル君。マリーヤとどうしても話

がしたくて。それで電報を打つたり、速達便を出そうとした

んだが……この件ではカーチャが君に随分迷惑をかけたよ

うで……しかし返事はいまだにない。だからフョードル君、出来れば直通の電話で連絡を取りたいんだ。……エー、

お話ししておいた方がいいかな。先日ブルシロフ將軍から、

モスクワに來いという呼び出しがあつてね……どうやら私に、軍に戻つて欲しい、という話らしいんだ。……何ですつ

て？ 電報は渡した？ 八日に？ 送り届けた？……あ、有難う、フョードル君。ご成功を祈る。（電話を切る。）順

調に行つてゐるんだ。マリーヤは見つかつて八日に電報は手渡したと言つてゐる。それから、明日にはホテルブルグに着くん

だ。遅くとも明後日には。あの子の為に部屋を掃除しておいてくれないか、ニエフェドーフナ。明日は夜が開けないうちに起きて掃除だ。……カーチャの言う通りだな。部屋を放つて置き過ぎた。このところ何もかもほつたらかしだつた。埃（ほこり）だらけだ。家具にカバーをかけなきゃい

んな。カバーはあるんだね、カーチャ。

カーチャ 全部の家具には無理。でもありますわ。

ムコーヴニン（あちこち歩き回りながら。）どうしてもカ

バーは掛けておかなきゃ。……あの子が出て行つた時のよ

うに部屋をしておくん

だ。その方が嬉しいだろうからな。それが出来るつていうのにやつておかない方はない。……そ

うだ、カーチャ、君は楽しむって言うことがないね。全然楽しもうとしないよ、君は、カーチャ。芝居には行かないし。それじゃ時代に遅れてしまう。

カーチャ マリーヤが帰って来たら(芝居に)行きますわ。

ムコーヴニン(フィリップに) すまんが、お名前をきかせてくれないか。

フィリップ フィリップ(アンドレーエヴィッチ)です。

ムコーヴニン どうだね、坐ってくれないか、フィリップ君。こんな面倒をかけて、まだ礼も言っていないじゃないか、私は。取敢ず御馳走をしなくちゃ。．．．ばあや、何か食べるものはないか。これからはいつでも歓迎ですよ。来て下さると嬉しいですよ、フィリップ君。マリーヤにも会ってもらおう。必ず。

カーチャ おじさま、どうぞ横になつて。お疲れですわ。

ムコーヴニン いいか。言っておくがな、私はリュドミラのことなど一秒たりとも心配してはおらん。良い薬なんだ。こんな子供じみたことをして。火遊びをしおつて。．．．言つとくがな、あの子には良い薬だと思つてゐるんだ。(全身震える。動きが止る。椅子に倒れる。カーチャ、駆け寄る。)

ムコーヴニン 大丈夫だ、カーチャ。大丈夫だ。

カーチャ どうなさいました？

ムコーヴニン 何でもない。．．．心臓が。．．．

(カーチャとガリーツィン、ムコーヴニンの両肩の下を支えて退場。)

フィリップ 気分がお悪くなって。．．．

ニエフェドーフナ(テーブルにナイフとフォークを置く。)
あんたの目の前で連れて行かれたんかの？ うちのお嬢さんは。

フィリップ そつ。目の前で。

ニエフェドーフナ 暴れたかの？ お嬢さんは。

フィリップ 最初は。それから諦めて。

ニエフェドーフナ ジャガイモがあるけえ。それに葛湯(くずゆ)が。

フィリップ そりやすごいもんだつた、おばあさん。水餃子が鍋一杯作つてあつてね、そしたら急にこたこたが起こつちやつた。はつと気がついた時にや、だーれもいやしない。

ニエフェドーフナ(フィリップの前にジャガイモを並べる。)
あんたのその火傷、戦争でかな？

フィリップ いや、軍隊に入る前、ずっと前から。．．．

ニエフェドーフナ これからまた戦争が起こるんかの。みんなはどう言いよる？

フィリップ(食べながら。)
八月。八月ぐらいかな、噂じゃ。

ニエフェドーフナ ポーランドかな、相手は。

フィリップ うん。

ニエフェドーフナ あいつらにや、欲しいものはみなやつたんじやないんかいの。

フィリップ あいつらはな、ばあやさん、北側に海があつて、南側に海がある、そついう国が欲しいつて言つてるんだ。あいつらの昔の国がそうだったからな。今も欲しいのさ。

ニエフェドーフナ あーあ、やれん(困つた) 国じゃあるのう。

(カーチャ、登場)

カーチャ おじさまがお悪いわ。お医者様を呼ばないと。

フィリップ 医者はこの時間は無理ですよ、お嬢さん。

カーチャ 死にそうなの、おじさまが、ばあや。鼻があおくなってきて・・・もう表情が死相になっている・・・

フィリップ この時間には医者も誰でも錠をかけてますよ。夜には往診はしません。拳銃を突き付けられたって動きやしません。

カーチャ 薬局に行つて酸素を・・・

フィリップ 連中は労働組合員ですからね・・・閣下は組合員ですか。

カーチャ 知らないわ・・・ここで知っていることなんか何もないみたい。

フィリップ 組合員でなければちょっと無理ですね。

(鋭い呼び鈴の音。フィリップ、扉を開けに行く。帰つて来る。)

フィリップ あそこに・・・あそこにマリーヤさんが・・・

(訳註 マリーヤはいない筈だが、不明)

カーチャ マリーヤ？

(カーチャ、前へ進む。両手を前に伸ばして。次に泣く。そして立ち止る。両手で顔を覆つ。それから両手を顔から放す。

カーチャの前に赤軍兵士、登場。約十九歳。長い足。後ろに袋を引きずっている。ガリーツィン、登場。扉のところまで立ち止る。)

赤軍兵士 失礼致します。

カーチャ まあ、マリーヤなの？

赤軍兵士 マリーヤさんから食料をこすかつてまいりました。これがそれです。

カーチャ あの人はどこ？・・・一緒にやないの？

赤軍兵士 マリーヤさんは師団です。全軍、作戦行動中です・・・食料以外にもあります。長靴、それに・・・

カーチャ あの人の、あなたと一緒にいなかったの？

赤軍兵士 あちらでは戦闘が進行中です・・・そんな暇はありません。

カーチャ 電報も打つたの。それに速達も・・・

赤軍兵士 どんな連絡があつても同じです・・・昼も夜もありません。戦闘です。

カーチャ あなた、あの人に会つて？

赤軍兵士 会わないわけありません。何かお伝えすることもあれば・・・

カーチャ そう。お願いするわ・・・あの人のお父さんが死にそうなの。助かるのはとても無理。伝えて頂戴。虫の息で、マリーヤ、マリーヤと最後まで呼んでいたと。あの人の妹リユドミラは、もう私達と一緒に住んでいない。逮捕されてしまつたつて。それからマリーヤさんに、どうぞお幸せに、と。そして私達と一緒にいなかった日々のこと思い出さないで欲しいと・・・

(赤軍兵士、回れ右。退場しかける。よろめきながら、自分の部屋から、ムコーヴニン登場。目は虚ろ。髪は逆立っている。微笑んでいる。)

ムコーヴニン まあ、マリーヤ。お前がいなくても、私は病氣などしておらんぞ。みんな元気なんだ、マリーヤ。(赤

軍兵士が目にはいる。(誰だ、これは。(より大きな声で繰り返す。誰だ、これは。誰なんだ。誰なんだ。)) (倒れる。))
ニエフェドールナ(ムコーヴニンと並んで両膝をつく。ムコーヴニンを抱きかかえて。)) どがーした、あんた。もういくんか? . . . わしのこと待ちもせんで. . .
(ムコーヴニン、死の躰(いびき)。息を引き取る時の苦悶。)

第八場

(真昼。目の眩むような陽の光。窓から冬宮の隅とエルミタージユの柱が強い光線に当たっているのが見える。がらんとしたムコーヴニン家の広間。奥でアンドレイとその下働きのクジマーが寄せ木の床を擦(こす)っている。クジマーは顔の大きな若者。アガーシャが窓から叫ぶ。)

アガーシャ 何やってるの、ニューシユカ。この馬鹿。駄目じゃないか、ガキに壁を触らせちゃ。汚れるだろ? 何処に目がついてるんだ。目の上でけつを下ろしているみたいじゃないか。 . . . 図体ばかり大きくなりやがって。頭はどこについてるんだい。 . . . チホーン、聞いてるのか、ほら、チホーン。なんで納屋を開けとくんない。閉めとくんない、納屋は. . . あーら、エゴローヴナ、今日は。あんた、私に塩を貸してくれない? 一日(ついでに)まででいいんだ。一日にはクーポンが手に入るんだ。その時すぐ返すから。娘を使いにやるからね。少しでいいんだから。一日までなんだ. . . チホーン、お前、ノヴァセーリツェフの家には行ったのかい? あいつら何時引越すんだ。

チホーンの声 引越し場所がないんだっていう話なんです。

アガーシャ 今までだつてちゃんと生きてきたんだろ? これからだつて生きてゆけるさ。引越もね. . . じゃあ、日曜日まで期限をやる。だけど日曜を過ぎたらこつちもただじゃおかないからね。ちゃんとそう言つとくんない. . . ニューシユカ、この馬鹿。お前、目はどこについているんだ。子供が鼻の穴に土をつつこんでるじゃないか. . . 子供は二階に上げるんだ。ほら、早くして。窓ガラスを磨くん. . . (床磨きの職人に。)) どうだい、親方。仕事は進んでるかい。

アンドレイ ああ、まあなんとかやつつけてる。

アガーシャ あまりやつつけちゃいないようだね. . . まだ隅がそんなに残つてるじゃないか。

アンドレイ どこの隅で?

アガーシャ 隅。四つともだよ. . . それに床。これは赤いじゃないか。ここを赤くしろと誰が言った. . . こんな色じゃなかつた筈だ。

アンドレイ 監督さん。最近はおつ材料がなくて. . . アガーシャ 金をちよるまかしてるんだろ。そしてお前さん、弟子にそのやり方を教えるんだ. . . 金を取る段になりや、きちんと取りに来やがって。

アンドレイ アガーシャ、あんた、革命が終わつて、最初に床磨きを頼む男があんたの一番の敵という訳かい。ほら、この埃。革命が終わつて、三インチもへばりついているんだ。鉋(かな)をかけたつて、取れるもんじゃない。革命が終わつて、床を磨く。わしに勲章をくれたつて罰はあたらない。それをお前さん、がみがみ怒鳴りつける. . .

(舞台奥にスーシユキンと喪服のカーチャ、登場。)

スーシユキン 家具分野における私の狂気、これ故にのみ、私は買うんですからな。ただ私の趣味の心がなせる技。骨董品の傍を通ると、もう矢も盾もたまらず買いたくなる。今どきこんな馬鹿でかいものを買うなんて、首にでかい石でも括り着けるようなもんだ。石もろとも沈んでおだぶつ。それがおちなんですからね。こりゃいいぞ、買っとけ、と今日は思う。ところが明日にや、どこへ押し込んだぎゃいいか、場所にも困るって話なんだ。

カーチャ お忘れのようね、スーシユキンさん。ここにあるものは、どれをとっても超一流品よ。この家具は百年前にストローガノフ家がパリから取り寄せたもの。

スーシユキン だから十億二千万。これならいいでしょう。カーチャ パンに換算すると、その十億って、どのくらいになるの？

スーシユキン パンになんか換算しないで、こんなものを買つというこの私の気違いざたの方を考慮に入れて下さいよ。今時分こんな馬鹿でかいものを買ひこんで……いの一番に連中のブラツクリストにのっちまいますぜ……(小さな声で)下でもう、うちの若いもんが、すぐにも運び出せるよ。う、待っているんですがね……(下に怒鳴る。)おーい、いいか。抑えとけよ。紐をちゃんと引つ張つとくんだ……アガーシヤ(舞台の前面に出る。)抑えとけて何だい、それは。

スーシユキン これはこれは、どなた様で？

カーチャ この人、このアパートの管理人。

アガーシヤ ふん、ただの玄関番だよ。

スーシユキン これはおはつにお目にかかります。昨今では、このように申し上げると分かって戴けるようで……つまり、「私共が家具をお運び致します。すると、お互いさま、みいりがあるというもので……」

アガーシヤ そうはいかんよ。

スーシユキン いかんと仰ると？

アガーシヤ ここへ地下室から上がって来るんだ。新しい入居者がね。(訳註 地下室は不明。)

スーシユキン 私共には勿論興味がありますな、その新しい入居者が……

アガーシヤ どこに家具を運ぶかがね……

スーシユキン いや、いや、そんなことに興味があるわけでは……

カーチャ アガーシヤ、マリーヤさんなんだよ、私に家具の処分を……

スーシユキン ちょっと失礼ですが、管理人さん。この家具はあなたのものぞ？

アガーシヤ 家具は私のものじゃないよ。だけどあなたのもんでもないだろ？

スーシユキン 下手に出てりゃいい気になって。いいか、俺とあんたとはな、立場が違うんだぜ。一緒にされてたまるか。それからな、言つとくが、このまま行くと不愉快なことになるんだぞ、いいんだな。

アガーシヤ 役所からの書類を持って来るんだ。そしたら家具は出してやる。

カーチャ アガーシャ、この家具はマリーヤさんのものなんだ。お前だつて知つている筈だよ。

アガーシャ そりゃ知つていますよ、お嬢さん。でも忘れなです。再教育のお陰で。

スーシユキン おい、あんた。どうなるか分かつてるのか！

アガーシャ 怒鳴るんじゃない。つまみ出すよ。

カーチャ 行きましよう、スーシユキンさん。

スーシユキン 職権乱用なんだぞ、あんた。分かつてるんだな。

アガーシャ 役所からの書類を持って来るんだ。そしたら家具は出してやる。

スーシユキン よし。出るところへ出て話そう。

アガーシャ どこへなりと。チェカーへでもね。

カーチャ 行きましよう、スーシユキンさん。

スーシユキン 今は行くけどな、見てろ。人を連れて帰つて来るからな。

アガーシャ お嬢さん、よくないですよ、こんなことしちゃ。

(アガーシャ、カーチャ、スーシユキン、退場。アンドレイとクジマー、床磨きを終り、道具をしまつ。)

クジマー あの人、うまく追つ払つちまつたね。

アンドレイ いやな女だ。

クジマー あの人もムコーヴニン將軍に仕えていた人？

アンドレイ そうさ。將軍に仕えていた頃はペコペコしていたんだ。でしゃばるなんて思いもつかなかったさ。

クジマー 將軍つていう人が、殴つたり・・・厳しかったんですね。

アンドレイ 殴る？ とんでもない。殴るなんて考えも及ばないよ。近くによるだろう？ すると手を握つてくれてな。親しく挨拶よ。俺達はみんな、あの人が好きだったな。

クジマー へえー、奇妙な話。みんなが將軍が好きだったなんて。

アンドレイ 馬鹿だったからなんだろうな。だけど、好きだった。法(のり)を越えたことはしなかった、というところかな。ご自分で薪を割つたりね。

クジマー 年をとつてた？

アンドレイ それほどの年じゃなかった。

クジマー でも、死んだ・・・

アンドレイ なあ、クジマー、人はな、年をとるから死ぬんじゃない。時期が来るから死ぬのさ。つまり、それが寿命さ。

(アガーシャ、労働者サフォーノフ、その妻エレナ、登場。サフォーノフは、骨ばつた、無口な男。エレナは妊娠している。背が高く、小さいテカテカ光つた顔。二十歳そこそこ。臨月が近い。所帯道具一切がっさいを背負つて、腰掛け、藁

布団、石油コンロを引きずつている。)

アンドレイ 待つて、ちよつと待つて。今下に何か敷くから。

アガーシャ 入つて、サフォーノフ。怖がることはないよ。

お前さん、これからここに住むんだ。

エレナ こんな立派な・・・もつと悪いところの方が・・・

アガーシャ 立派なところに慣れるんだね。

アンドレイ 立派なところに慣れる・・・簡単なことさ。

アガーシャ 左が台所、そこがバス・・・身体を洗う所さ。
(サフォーノフに。) あんた、残してきたものを運ぼう・・・
エレナ、あんたは坐ってるんだ。来ることはない。流産
するといけない。

(アガーシャとサフォーノフ、退場。アンドレーイ、自分の
道具・・・ブラシ、バケツ・・・をしまう。エレナは腰掛
けに坐る。)

アンドレーイ 引越、おめでとう・・・か。

エレナ そぐわないわ、悪いみたい・・・大きくて・・・

アンドレーイ いつなんだい、生まれるのは。

エレナ 明日。

アンドレーイ 心配はいらぬさ。モイカ町？ それと

も宮殿？

エレナ ええ。そう。

アンドレーイ あの宮殿も今じゃ「母と子の宮殿」と名前
がついて・・・昔、あそこは、女の皇帝が、ある羊飼いのた
めに建ててやったんだが、(訳註 エカチエリーナ十二世が
情人の為。 城田) 今じゃ産婦が行って子供を産む。設備も
いいらしい。心配はいらぬさ。

エレナ 明日行くのよ、小父さん。ふと心配になったり、
ふと大丈夫って思ったり・・・

アンドレーイ 心配はいらぬ。お産したってくしゃんと
も来ないよ。そりゃ、全神経、全血管が緊張するさ。だけど、
一旦生まれてしまえば、後は何が起こったか、憶えてもい
ない。

エレナ 小父さん、私、あそこが小さいの。

アンドレーイ そりゃ、あそこに頼むのさ。大きくなって
ね、ってね。ほら、小母さんがよくいるじゃないか。神経質
そうな、髪はもじゃもじゃ、小さい足、小さい手。だけどこ
の小母さんが赤ん坊を取り上げるんだ。どんな赤ん坊だと思
う？ 将来、桶からウオツカをがぶ飲みするような、げんこ
つで何でもぶつ倒すような男になる赤ん坊をだよ。餅は餅屋つ
て言うじゃないか。(両肩に袋を担ぐ。)(男の子がいいの？
それとも女の子？)

エレナ どっちでもいいの、私。

アンドレーイ そりゃそうだな。どっちだっていいさ。私
は考えるんだ。今生まれる子供達はこれまでよりも良い人生
を送るんじゃないかって。そうじゃなくっちゃ困るよな。

(自分の荷物を集める。)(さあ、行こう、クジマー。(エレ
ナに。)(お産したってくしゃんとも来ないよ。餅は餅屋さ。 34
心配はいらぬ。・・・さあ、行こう、クジマー。)

(床磨き二人、退場。エレナ、窓を開ける。部屋に陽が入
る。そして、通りの喧騒が。腹を前に突き出してエレナ、
用心深く壁に沿って歩く。壁に触れる。隣室(複数)を覗く。
シャンデリアをつける。消す。ニューシャ、登場。ひどく顔
の赤い娘。バケツと雑布を持っている。窓を磨くため。窓の
敷居に登り、スカートの裾を膝の上までたくし上げる。太陽
の光が降り注いでいる。アーチを支えている彫像のようにニュー
シャ、春の空を背景にして立っている。)

エレナ ニューシャ、あんた、引越のお祝いに家に来る
かい？

ニューシャ(低い声で。)(呼んでくれりゃ、行くよ。でも

何を出してくれる？

エレナ ご馳走はあまり出来ないわ。あるもので・・・
ニユーシャ 私、甘いワインがいいわ。赤いワイン・・・
（突然、甲高い声でニユーシャ、歌い始める。）
ニユーシャ

コサックが馬を駆る。谷を横切り、
満州の地を越え、

緑の野原を突っ切って、

手には指輪が光っている。

愛する女が贈った指輪。

それは男の出兵の時。

女は贈り、そして言った。

一年後にはあなたのもの、と。

そして一年は過ぎ去った・・・

（幕）

平成五年（一九九三年）二月九日 訳了

<http://www.aozora.gr.jp> 「能美」の項 又或、

<http://www.01.246.ne.jp/tnouni/nouni1/default.html>